私を満たすお方

小山田　忠功



前列左が妻の千恵さん、後列右が忠功さん。ご家族と共に

1イエス様との出会い

小学校四・五年生のころだったと思います、妹が叔母に連れられて近くの教会へ行っていたのがきっかけで私も行くようになりました。小・中学生のころはイエス様のことや聖書の話を聞くのが楽しく、中学生のころはよく土曜日の授業が終わるとそのまま教会へ行き、しばらく遊んでから家に帰っていました。私の中で、イエス様、聖書は身近なものでした。しかし高校生になると聖書の戒めを重荷と感じるようになりました。卒業するころには宗教は人を束縛するものだと思うようになり、卒業し郷里を離れるのを機に、今後は宗教とは一切関わりを持つまいと決心し、教会から離れました。

なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。（ローマ　9・32）

2イエス様との再会

イエス様との再会のきっかけは、会社にキリスト集会へ導かれた三人の先輩方がいたことでした。その方々から「今度ベックさんという宣教師が来るけど、集会へ来てみないか」とお誘いを受けました。仕事への影響を懸念し、どう断ろうか悩みましたが、心とは裏腹に、野田暢子姉妹のお母様が住んでおられたお宅での集会へ行き、ベックさんとの交わりも与えられました。そのときベックさんは三位一体のお話をしてくださいましたが、教会でよく聞かされたことであり、私の心も閉ざされていたので、心に響いてきませんでした。

その後何度か集会に誘われ、福岡県大牟田市での喜びの集いにも誘われました。洗礼を勧められたら絶対に断ろうと決心し、家内と共に参加しました。予想通り洗礼を勧められました。家内はそのとき初めて集会へ参加したのですが、家内から「あなたが受けるなら一緒に受ける」と予想しなかったことを言われました。人の決心は当てになりません。結局、一九九二年二月九日、その喜びの集いで家内と共に受洗しました。「洗礼はすでに救われた者がイエス様を公に証しするためのものです」とベックさんは言われますが、私たち夫婦の場合はまったく証しになっていませんでした。

洗礼を受けた後も私の心は晴れませんでした。しかし受洗したからには、とにかく集会に続けて集おう、そして苦しくて耐えられなくなったら離れようと決心し、家内と集い始めました。改めて聖書に何が書かれているのか知ろうと思い、毎晩、聖書を読みました。同時に、長い間心の底に眠っていた疑問が頭をもたげました。「バプテスマのヨハネは小娘の一言で、牢の中で首をはねられたけど、殺されるとき、どんな心境だったのだろうか？人はそういう状況でも平安を持てるものだろうか？」ということでした。何か手掛かりが欲しいと思い、聖書を読みました。しかし

聖書が霊的なものであることを悟らず、知識として理解しようとしていたので、みことばが私の内で生きて働くものとなりませんでした。

それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。（2ペテロ　1・20〜21）

後に、聖書が私の疑問に答えてくれていることがわかりました。

御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。（ガラテヤ　5・22）

平安を含め、これらはすべて人間から出るものではなく、イエス様から頂くものでした。

3 家族の救い

私の両親は、私と妹が教会へ行くことも、大人になってキリスト集会へ集うことも、反対しませんでした。家内と私が集会へ集うようになった年の暮れに、両親は一度だけ集会へ来てくれましたが、それきりでした。翌年の一九九三年六月に父が背中の痛みで入院、そして手術しました。手術後一週間ほどして母と私は主治医から、父が肝臓と食道に癌があり、長くてあと半年の命であることを告げられました。このことを集会の兄弟姉妹に伝え、ある兄弟の助言も頂き、私が父に事実を告げれば、後はイエス様が働かれると思わされました。私は勇気づけられ、仕事帰りに病院へ行きました。しかしベッドの上の父を見たら、怖くなって何も言葉が出てきませんでした。毎日病院へ行きましたが、話せない、とても苦しい日が続きました。

勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない。（使徒　23・11）

数日後、なぜかわかりませんが、私は押し出されるように父に話していました。肝臓と食道の癌を取り除くことは無理であと半年の命であること、自分のわがままを告白して助けを求めればイエス様は私たちを天国へ連れて行ってくれる、これらのことを必死で話していました。父はただ黙って聞いていました。

次の日、病院に行ったら父は、「夕べは眠れんかった。人間とは弱いもんだなあ」と正直に私に言いました。そしてすぐに「今度集会はいつあるんか?」と予期しなかったことを聞いてきました。私は翌月の宮崎県綾町での喜びの集いのことを話し、「宮崎は隣の県だけど車で五〜六時間もかかるので疲れるよ」と言ったら、「いやあ、どこへでも行くぞ」と返事が返ってきました。退院四日後の七月三日、宮崎喜びの集いで父と母は受洗しました。後日父は、ベックさんが交わりの中で話してくださった、「人間は病気では死なないよ。イエス様から『おいで』と呼ばれたときに死ぬんだよ」という言葉が嬉しかったようで、私に話してくれました。そして十月十六日、イエス様に呼ばれ、父は天国へ召されていきました。

父の葬儀は聖書に基づいて行われましたが、イエス様は予期せぬことを見せてくださいました。会葬された方々に「光よあれ」という兄弟姉妹方の証し集をお配りしたのですが、それを読んだ後、吉祥寺キリスト集会に電話し、「光よあれ」を全集取り寄せて読んでしまった人がいました。その方は吉武さんという、私の幼友達のお兄さんでした。当時、吉武さんも苦しんでいた方で、苦しみを通してイエス様を受け

4 私の救い

私が救いを確信したのはそれから数年後でした。集会に集っているうちに私は段々と自分の罪のことを思わされ、その罪の思いから解放されたいと願うようになりました。そして悔い改める、しかしまた同じ罪を犯す。それを繰り返していました。そのころの私は、「悔い改めるとはどういうことなのだろうか？救いの確信とはどういうものなのだろうか？」という思いが渦巻いて、どうしていいかわからない状態が長い期間続きました。当時、会社へは車で片道約五十分かかり、ベックさんのメッセージや証し・賛美のテープを聞いて通勤していましたが、ある日、会社の駐車場に着いたときには涙と鼻水に顔がおおわれて、しばらく車を降りれないということがありました。自分の強情さ、惨めさに触れる、そのようなものが入り混じった思いだったように思います。そのころふと、「自分の罪はもしかして死ぬまで治らないのでは

入れるようになりました。

もう一つ、不思議なことですが、父が病気になった当時、私には救いの確信がありませんでした。そんな私が必死で父に死が迫っていることを告げ、イエス様の話をしていました。後に思わされましたが、これはまったくイエス様のご計画でした。イエス様は私の状態に関係なく、ご自分のご計画を成されたかったのです。

天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

（イザヤ　55・9～11）

はなかろうか？」と思わされました。日が経つにつれ、その思いが強くなると共に「死ぬまで治らない者のためにイエス様は死なれたのか」と思わされるようになりました。そのころからですが、なぜか心の内側から沸々と喜びが湧き出るのを覚えました。聖書のみことばが素直に心に入ってきました。

それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。　（ローマ　3・27）

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。　（ローマ　5・8～11）

沸々と湧き出る喜びは、私を贖われたお方がくださる喜びでした。イエス様に心を閉ざし続けていたら、聖書の戒めは生涯の重荷でした。しかし重荷はなくなりました。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。　（詩篇　119・130）

わきまえのない者をイエス様は見放さず、砕こう

とずっと働かれていました。

5家族のこと

家内と私は一九八三年四月、キリスト集会へ導かれる前に結婚しましたが、自分がもし結婚するときは教会では式をあげまい、と前から決めていました。式の中で誓約に関して、「聖書に『決して誓ってはいけません』とあるのに、なぜ誓わせるのか？」と納得できなかったのです。しかしほんとうは、「誓います」と言えばイエス様に嘘をつくことになる、と知っていたからです。私はイエス様を拒んで生きてきましたが、心の底ではずっとイエス様を意識していたように思います。

それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。

（マタイ　19・6）

結婚は神様が定めた霊的なものでした。誓約はこれから二人でイエス様に頼って生活することを公に宣言するものだ、と後に分かりました。結婚も誓約も、自分の力では手に負えないものでした。

結婚後、二人の娘が与えられました。家内は私と違い、穏やかな性格で思いやりがあり、私にとって不足のない妻です。しかし子どものことでは家内と中々一致できませんでした。私たちがキリスト集会へ導かれた後もそのような状況です。しかし、みことばが悔い改めへ導いてくれるのはとても大きな恵みです。

同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

（1ペテロ　3・7）

長女（伊織）は黒木晃一郎さんとの結婚へと導かれ、二〇一三年十一月、ベック兄の司式で挙式しました。晃一郎さんはそれまでイエス様を知りませんでしたが、彼と初めて会って話をしたとき、私たちの持っている信仰を自分も持ちたいと素直に話してくださり、イエス様に感謝しました。

次女（絵美）は、仕事を通してイエス様の訓練を受けています。

6私を満たすお方

娘たちが小さかったころ、私はふと底無しの闇にいるような不安で胸が締め付けられることがありました。イエス様に救われてからも悩みや苦しみはありますが、かつてのような不安は消えました。私が心の底でずっと欲しかったものは、変わらない平安、心の満たしでした。私の性質が死ぬまで直らないのをご承知で、イエス様は私を満たしてくださいました。

人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

（エペソ　3・19）

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。

（箴言　10・22）

小山田忠功（おやまだ　ただのり）
一九五六年大分県生まれ
大分県立国東高等学校
専修大学
日本テキサス・インスツルメンツ株式会社　退社
妻・千恵（ちえ）、長女・黒木伊織（くろぎ　いおり）、
次女・絵美（えみ）

主がくださる平安と喜び

小山田　千恵

私のたましいを御手にゆだねます。真実の神、主よ。あなたは私を贖い出してくださいました。（詩篇 31・5）



左から、娘の伊織さん、伊織さんの夫の晃一郎さん、夫の忠功さん、千恵さん

私は横浜で両親と三歳年上の兄の四人家族で育ちました。父は電気関係の設計士で、自宅で仕事をしており毎日、ときには徹夜をしながら大きな図面に細かい線を引いていました。温厚な人柄で怒られた記憶がないほどです。母はいろいろなことに興味をもち、趣味でいくつかの文化教室にも通っていましたが、しつけには厳しく、子どものころ遊びに夢中で帰りが遅くなると、玄関のカギを掛けて締め出されることもあり、そのときはお隣りの子どもがいないご夫婦の家にお世話になっていました。

中学、高校と運動部で真っ黒に日焼けし、ときどき部活の友人とのトラブルで悩むことはありましたが、それほど問題もなく過ごしていました。そんな私のなかの大きな出来事は、十八歳のときの母の死でした。

高校を卒業し短大入学までの間の春休み、私は友人とアルバイトをしていましたが、ある日バイトを終え帰宅し夕食を食べていると、入浴していた母が、気分が悪い、と出てきて倒れてしまいました。すぐ救急車を呼び近くの救急病院へと搬送されていきましたが、くも膜下出血でした。幸い間もなく意識を取り戻し、翌日には話しもできるようになって一安心しました。特に手術の必要もなかったようで、徐々に回復に向かっていました。ところが肺炎を併発して容体が急変し、お見舞いにきてくれていた東京の叔母（母の妹）と、石川県の叔父（母の弟）が、翌日にはそれぞれ帰る予定だったその日の夜中に病院から連絡が入り、皆で駆けつけたときには母は心臓マッサージをされているところで、結局そのまま息を引き取りました。倒れてから二週間の出来事でした。母は四十九歳でした。

元気だった母の死は私にとってとてもショックで、しばらくはまったく食欲もなく食事が喉を通っていかず、入学したての学校も辞めてしまおうかと思ったほどでしたが、叔父の言葉で引き留められました。それまで人の死に接する機会もなく、考えたこともなかったのに、一番身近な存在で、今までもこれからもずっといてくれるはずと思っていた母親の突然の死を受け入れられずにいました。信仰心はありませんでしたが、母の入院中毎晩、回復を神様に祈っていました。けれど叶えられず、空しさで一杯でした。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。

（伝道者　3・1～2）

社会人になり三年目に主人と出会いました。その誠実な姿に惹かれたのですが、それが頑固さや融通の利かなさの表れであったことは後に気付きました。初めて父に主人のことを話したとき、父は「九州は

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。（イザヤ　55・8～9）

大分市での新しい生活が始まりました。間もなく長女の伊織が生まれ、慣れない土地と子育て、また主人は休みになると自分の趣味のために出掛けてしまうという生活に孤独感を強めていきました。あるとき、共に転勤になったご夫婦がキリスト集会に導かれたことを主人から聞きました。その後主人は何度か集会に誘われて行っていましたが、私は子どもが小さかったこともあり、集ったことはありませんでした。

そんな中、一九九二年二月、福岡県大牟田市で行われたバイブルキャンプに誘われ、家族で行くことになりました。その前日、「洗礼を受けるなんて言わない

遠いな。九州男児は苦労するぞ」と言いました。娘が離れて行く寂しさからだったと思います。その後、主人の実家の大分県国東で初めてご両親にお会いしたとき、義父から「この地で骨を埋める気はあるのか」と聞かれ、私は返事に困ってしまいました。そんなつもりはまったくなかったからです。主人の実家は商売をしていましたが、主人は長男でありながら東京で就職しており、家業を継ぐつもりはない、と言っていたのです。私もそのつもりでしたから、戸惑い、悩みましたが、主人は「何とかなるよ」と楽観的でした。そして、主人が二十六歳、私が二十四歳の一九八三年四月に国東で結婚式を挙げました。

結婚して三年が経とうとしていた一九八六年二月、主人の会社の何組かのご家族とほぼ同時期に大分県へと転勤になりました。骨を埋める気など毛頭なかった大分の地への道は、正に主のお導きでした。それは、主が私たちに用意してくださっていたご計画だったのです。

でよ」と私は主人にくぎを刺し、主人も「そんなことはしないよ」と答えていました。初めて集う集会、大勢の人々、ベック兄とのお交わり…戸惑いの中で、私の意思とは関係なくことが進んでいきました。記憶に残っているのは、ベック兄の後について一緒に祈ったこと、夜のお交わりの中で、共に転勤になり先に救われていた姉妹たちが言っていた、「子育てや他のことについての、自分の思いではない確固たる基盤」、ということでした。それが何なのか私も知りたいと思いました。しかし「一番大切なのは夫でも子どもでもなく、イエス様」の言葉は、そのときは理解できませんでした。お交わりの中で洗礼を勧められ、主人は迷っていたようでした。主人が受けるならいずれは私もそのときがくるだろう、それなら一緒に受けたいと、主人を止めるどころか、夫婦二人で受洗の恵みに与ったのでした。主のときでした。

10 人の証し

Unser HERR lebt

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。（ヨハネ　15・16）

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。（マタイ　6・33）

何も分からないのに洗礼を受けて良かったのだろうか…色々な思いはありましたが、とにかくそれからは五歳と二歳になったばかりの娘を連れ、主人と集会に集い続け、また各地の喜びの集いにも参加しました。でも、メッセージの途中で娘がぐずり出し抜け出さなければならないことがしばしばで、そんなと

きベック兄の言われた「この状態は一生続くものではないよ」の言葉を思い出し励まされました。

私たちが信仰を与えられた翌年、一九九三年に義父に肝臓癌が与えられ、病名が分かったときには、すでに余命数カ月とのことでした。私たちの信仰に理解はあったものの、自分には必要ないと言っていた義父が、病を通してイエス様を受け入れたのです。その年の夏、宮崎県の「綾喜びの集い」で義母と共に洗礼を受けました。心を決めてからの義父の決断は早いものでした。

十月に召されるまでの義父は平安そうでした。イエス様が包み込んでくださっていたようでした。入院中看護士さんたちが、「この病室に来るのはとても気が楽だ」と言っていたという話を聞きました。主の平安と安らぎが満たされていたのだと思います。そして賛美が響く中で義父は召されていきました。寂しさと同時に、天国での再会の希望が与えられました。

このことを通してイエス様が私に、ご栄光とご臨在を示してくださいました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（1コリント　10・13）

私たち家族は、飛行機を利用して御代田の福音センターに集うときには、横浜の実家に寄っていました。しかし、なかなか福音を伝えることはできませんでした。ただ、集会の冊子を持っていくと、父は毎回受け取ってくれました。父は兄家族と同居していましたが、二〇〇一年九月、兄から、父が自宅で倒れ緊急手術をすることになったと連絡がはいりました。小脳出血とのことでした。その日は、兄家族が泊りがけで出かける予定だったそうで、もし発見が遅れていたら、と思うと主の守りとご配慮に感謝しました。手術は無事に終わりましたが、それから入退院を繰り返し、徐々に体が弱っていきました。二〇〇三年の六月、召される二カ月前にベック兄姉や吉祥寺の姉妹方が、父の入院先の戸塚の病院にお見舞いに来てくださることになりました。私には思いも寄らなかったことでしたが、ある姉妹が勧めてくださいました。眠っているような父の耳元で、ベック兄は大きな声で、罪のこと、救いのこと、天国のことを語ってくださり、そしてお祈りをしてくださいました。すると父は涙を流しはじめました。魂に触れ主と出会った瞬間だと私は思い、父の救いを確信しました。そして一歩踏み出さなければ、この恵みを体験することもなく後悔していたことと思います。憐れみ豊かな主のご愛に心から感謝しました。八月に召されたときも、その数日前から父の病室で二人の静かなときを与えていただき、みことばを読み、お祈りすることもできました。そして最善のときに天国へ引き上げてくださいました。

神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。

（2テモテ　1・7）

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。

（2テモテ　4・2）

二〇一〇年の半ば、私は体の下腹部に小さなしこりのような物があるのに気が付きました。数日間は気になって、触れていましたが、そのうち忘れていきました。秋になり喉や食道の辺りがつかえる感じがし、とうとう暮れに胃カメラの検査をすることにしました。胃や食道は問題なかったのですが、そのときの医師に、

にまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ　4・6〜7）

子育てに関して、主人は娘たちに厳しく、娘も反発していましたが、最後は父親の言うことに従っていました。二〇〇六年十一月、長女の伊織が大学二年、次女の絵美が高校二年のとき受洗の恵みに与りました。そのときはいつも控えめな妹が姉の背中を押すような形で、躊躇していた長女も妹と一緒に受洗をする決心をしたようでした。主はそのときどきに必要な助け手を備えてくださいます。

二〇一三年二月、伊織から突然、結婚したい人がいるので会ってほしい、と言われました。まったくそのようなそぶりは無かったので非常に驚きましたが、その一、二年ほど前から子どもたちの結婚のことを主人と祈っていたので、その答えをくださったのだと思いました。私たちが黒木（くろぎ）晃一郎さんと初めて会ったのは娘から聞いた八日後でした。彼は、とても素直に私たちの信仰の話を聞いて、自分も知りたいと言ってくれました。宮崎の実家のご家族も私たちの信仰を理解してくださいました。その後、三月の「福岡喜びの集い」でのベック兄とのお交わり、九月の「長崎喜びの集い」での晃一郎さんの受洗と、思いがけない方法で次々と道が開かれていき、同じ年の十一月、「大分喜びの集い」で、ベック兄の司式により結婚式を挙げさせていただきました。多くの兄弟姉妹が見守ってくださる中、みことばと賛美が溢れ祝福された門出となりました。年の初めには考えもしなかったことでしたが、主の大いなるご愛とお導きに感謝で一杯です。そして、大分集会に新しい若い兄弟が加えられたことは大きな恵みです。

早いうちに婦人科に行った方が良いと告げられたのです。年が明け早速婦人科を受診すると、お腹の中一杯の腫瘍が見つかりました。当然手術ということになりましたが、ここまで大きくなっているのに気が付かない自分にも呆れました。腫瘍は手術中の組織検査で調べてみないと良性か悪性か正確には分からない、境界悪性と言われました。その場で手術の日程が決められましたが、自分に起こされていることがなぜか他人事のようで、悲しみや動揺や不安から不思議と解放されていて、お祈りをしてお委ねできる幸いを覚えました。二〇一一年二月、卵巣腫瘍の摘出手術を無事終え、組織検査も良性でした。主の憐れみと兄弟姉妹方のお祈りに心から感謝しました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えかれます。（マタイ　7・7）

日々自分の内側の我儘（わがまま）な醜い心との葛藤ですが、主を見上げ信頼してお委ねし、祈りつつ歩み続けたいと願っています。

民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。（詩篇　62・8）

小山田千恵
一九五八年横浜市生まれ
神奈川県立松陽高校
東洋女子短期大学
夫／忠功（ただのり）、
長女／（黒木）伊織、次女／絵美

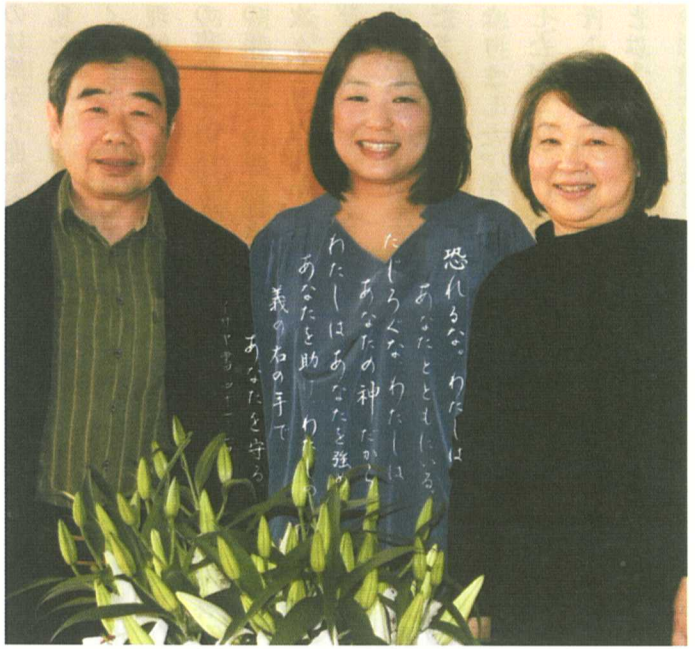
求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開

10人の証し

Unser HERR lebt

賛美の恵みに預かって

野間　愛



真ん中が愛さん、お父様の義明さん、お母様の行子さんとともに

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。（ヨハネ　15・16）

私はクリスチャンホームに生まれ育ったので、生まれたときからイエス様の存在が当たり前のように思っていました。子どものころは素直にイエス様のことを受け入れていましたが、高校を卒業してからの三年間、イエス様から離れる、というこの世的な解放を味わいました。

このときはフリーターで、派遣会社に勤めたり、居酒屋で働きつつ、自由気ままな生活を送っていたのですが、最終的にはバイトの人間関係に疲れ、交通事故を起こし、ボロボロになり、イエスさまの下（もと）に戻ってきました。親にも周りの人々にも迷惑ばかりかけて生きている自分の惨めな姿を見て、こんな私のためにご自分の血を流し、十字架の死によって罪を赦してくださる、イエス様の愛に癒され涙したのを憶えています。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。まことに、あなたは喜びをもって出て行き、安らかに導かれて行く。」（イザヤ　55・6～12）

二十一歳の春、徳島文理大学の短期大学部で声楽を学び始めました。初めは、ただただクラシックの声楽の驚異に値する人間の声に感動し、どうやったら大きくて美しい声が簡単そうに出せるのか、そのことを考えて歌うのが楽しくてしょうがありませんでした。短期大学部では声楽を専攻している人が少なかったので、すぐに高い評価を得ることができて嬉しかったですし、なにより綺麗なドレスを着ることができる本番が楽しくてしょうがありませんでした。短大を卒業したときは学年で一番評価が高く、卒業と

同時にオーケストラとの共演や中四国の新人演奏会への推薦も受け、同時に四年制大学へ編入をさせていただきました。

しかし三年生になってすぐに、恩師がご病気になられご指導いただけなくなったこと、上手く歌わなくてはいけないというプレッシャーに悩まされるようになったこと、そうしたことで、人前で歌うことに恐れを覚えるようになりました。舞台に立つと極度に緊張して、歌詞を忘れてしまったり、思ったような演奏ができないことが続き、イエス様に頼らなければ歌えないようになりました。「私は自分のために歌ってるんじゃない。私は賛美をするためにこの声を与えられたんだ」、そう思わされ始めたのはこのころからでした。

四年生になると、大学からウィーン国立音大の夏期講習会に推薦していただき、一ヶ月くらいかけてヨーロッパに滞在し勉強する機会をいただきました。そのとき、外国の先生がたのレッスンを拝見し、日本人が上手くなるためには、日本人の特徴が分かる日本人の先生に教わるべきなのではないか、と思わされました。そして都会にある、皆が切磋琢磨する場所に行かなくてはと考えた結果、東京芸術大学を受験することを決めました。

芸大受験にはたくさんの課題があり、昔ピアノを少しやっていた程度の私にはたくさんの努力が必要でした。案の定、一回目の受験は不合格に終わりました。両親は祈っていてくれましたが、父には「大学を卒業させたのに、また大学いくのか?」と言われましたし、母も私が浪人してまで東京芸術大学を目指す意味など理解できないようでした。しかし、私はアンサンブルができる仲間も欲しかったし、東京芸術大学に行かなければ!という思いで突き進みました。

そのとき恩師に紹介していただいた東京芸術大学の先生はすごく偉大な功績を残された先生でした。

まだまだ現役で歌っていらっしゃる先生で、厳しく「今までの四年間のことを忘れるくらいの気持ちでレッスンを受けに来なさい」と言われ、まず文理大学で学んだことは全否定されました。それでも、ここで頑張らなかったら次に進めないと思っていた私は必死でした。しかし、必死になればなるほど歌えなくなっていき、歌も楽しくなくなっていきました。受験願書提出直前になると、もうどうしたら良いか分からない状態まで追い込まれていて、先生からは「君は受からないから受けないほうが良い」と言われ、破門されてしまいました。こんなに必死に頑張っている私に対して、この時期にこんなに冷たい対応をする方がいるのかと驚きました。イエス様は私に何をさせたいと思っていらっしゃるのかと悩み苦しみました。今思えば、先生は、ここで辞めさせなければ私がとても苦労するだろう、と心配してくださったのだろうと思います。イエス様は、私がこの状況にお手上げになって、イエス様にすべてを任せるようになることを望まれたのだと思います。とはいえ、そのときはもうどうしていいか何も分かりませんでしたし、歌うことを辞めたいとも思っていました。気持ちよく歌うこともできなくなってしまい、何もする気になりませんでした。しかし、「ここまで頑張ってきたんだし、せっかくだから受けたら?あなたにはあなたの音楽があるんだから」と家族や恩師に後押ししていただき、願書を出しました。願書を出してから試験までの約一ヶ月は、ぼーっとしていたら泣いてしまいそうな心理状態で、朝起きては聖書を読み、練習し、歌や楽典のレッスンを受け、聖書を読んで寝る生活でした。破門された東京の先生の完璧とも言える歌をCDで聞きながら、何もできない自分が悔しくて泣きました。「もし私が賛美をすることがみこころならば、私にどこまでも聴こえる声で賛美する技術を与えてください!もしそれがみこころでないなら大学に通らないということ

10人の証し

Unser HERR lebt

で示してください」と祈りました。

受験結果はイエス様からの答えだ、そう思いながら受験し、合格しました。「これが答えだ」と仰ってくださったことが嬉しく、苦しみから解放され、前に進むことを許された幸せでいっぱいでした。そしてさらに、愛の溢れる、あたたかくて素晴らしい先生のもとで勉強できる機会をいただきました。今になって考えると、イエスさまは受験の苦労によって私の自信や傲慢な心を打ち砕き、本当の意味で賛美に必要な砕かれた心をお与えになろうと思われたのだと思います。

それからの大学四年間のうち、初めの二年間のレッスンはほとんど発声の勉強に費やすことが許され、自分の本当の声と向き合う機会をいただきました。そのおかげで、自然に歌う基礎を持つことができ、歌う上での自由をいただくことができました。

私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。（1コリント　3・6〜7）

「私には賛美しかない。賛美するために生かされているんだ」、そう思えることで、同級生たちに対する敵対心から解放されることができました。実際の生活は貧乏で、ボロボロの寮に住んだり、家賃が二万九千円のお風呂なしのアパートに住んだり、お湯の出ない洗い場で頭を洗ったこともありますが、賛美のために生きる毎日は幸せでした。

私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださった。彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。「彼らの顔をはずかしめないでください。」この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こ

うして、彼らはすべての苦しみから救われた。

主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。

若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。主を恐れることを教えよう。（詩篇　34・4〜11）

今でもこの世のことで頭がいっぱいになって、気がついたら主から離れてしまっているときがありますが、家族もいつも祈ってくれています。私が間違った方向に向かっているときは、いつも主が呼び戻してくださいます。

自分のことで精いっぱいな毎日ですが、最近はやっと、まわりの人のために祈ることができるように導かれています。そしてイエス様にある兄弟姉妹との交わりは、イエス様との交わりであるということを実感させられています。これから先も、この世と調子を合わせずに生きることに迷うこともたくさんあると思います。しかし、主に委ねつつ、その都度祈り、知恵をいただきながら生きて行きたいと思っています。

あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れ

10人の証し

Unser HERR lebt

ては、あなたがたは何もすることができないからです。
（ヨハネ　15・3〜5）

野間愛

一九八三年年十一月三十日、父（野間義明）、母（行子）のもと、野間家の三女として三重県に生まれる。大阪を経て四歳から徳島県へ移住し学生時代を過ごす。十九歳で香川県へ単身移住。小路陽光氏のオカリナ工房「あい」にて、オカリナの製作と演奏を学ぶ。二〇〇五年四月、徳島文理大学短期大学部に入学し声楽の勉強を始める。徳島文理大学を卒業後、一年の浪人生活を経て東京芸術大学音楽学部に入学。二〇一五年現在、東京芸術大学大学院オペラ科に在籍。

いつも導いてくださるイエス様

野田　浩司



左奥が浩司さん、妻の牧子さん、長女の愛香さん、次男の勇矢さん、長男の主樹さん

私は一九七〇年、東京杉並区で父繁と母暢子、そして兄賢一と四人家族の次男として生まれました。気が小さく、人見知りでありながら頑固で負けず嫌い、人を楽しませるのは好きだが社交的ではなく、大勢でいるのがきらいと、とにかく難しい性格の子どもだったと思います。

母がいろいろなことに悩み、池尻姉妹に誘われて吉祥寺集会に集い始め、我が家に救いが入ってきました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒　16・31）

この言葉どおりに次に父、そして兄、そして私と救われ、クリスチャンホームになっていきました。家族への救いが実感できたのは父の変化だったと思います。救われる前の父は、きちっとした性格で怖い雰囲気

がありましたが、救われてからは心地よい穏やかな空気が家族を包むようになっていきました。

吉祥寺集会へ集い始めたのは小学校三年生ごろでした。日曜学校に通い、聖書に書かれていることを何一つ疑うことはありませんでした。自分では救われていると思っていました。イエス様がみんなの罪のために十字架にかかって死んでくれたことを信じていると思っていたからです。ただ、自分の罪のために死んでくださった、と気がつくのは中学校に入ってからでした。

小さなころからイエス様はたくさんの恵みをくださいました。だめなことはだめ、と警告してくださることを多くの体験から実感しました。また、祈りは必ず良い結果を生むことも実感しました。

中学になると、自分の性格や人間関係に悩み、本当に小さなことでもストレスを感じることが多かったです。どのようなことでも一度は人に頼らず自分でやってみようとするのですが、まったくうまくいかず、それでもがんばってやろうとしていました。しかし、残る選択肢は聖書と祈りしかないという状態になって、行き詰まって祈ると問題そのものが消えて何もかもがすっきりと解決する、そんなことの繰り返しでした。

イエス様が繰り返し、多くの恵みを、日々与えてくれました。このようにして、自分自身の罪は本当にどうしようもなく、そのどうしようもない自分の罪のせいでイエス様が十字架にかかられたと分かり、肩の荷がおり、からだが軽くなりました。

吉祥寺の旧会堂で洗礼に与かれたのは中学生のときでした。もし救われていなければどうなっていたか分かりません。生きるために必要な多くの恵みをいただいていることを感謝しています

大学を卒業するまでは吉祥寺集会に集っていたのですが、携帯電話関連の会社に就職が決まり、大阪勤務となってから、集会を離れがちになりました。仕事は楽しく出張も多かったため、なかなか礼拝には集うことができず、少しずつ離れていってしまったのです。就職三年目に東京に戻ったのですが、やはり集会は離れがちでした。自分では、救われている、と都合よく思っていましたが、少しずつ主から離れていき、平安のない忙しい日々を過ごしていました。

そんなとき、父が脳梗塞で倒れました。ＩＣＵ（集中治療室）で表情のない父を見たときはかなりショックでしたが、「このことも主から来ている、主がこの後のことも最善を用意してくれる」と信じて祈りました。「主は耐えられない試練は与えられない、むしろ脱出の道も用意していてくださる」と聖書に書かれている通りに、主は最善をなしてくださいました。このことをきっかけに実家に戻ることになり、クリスチャンホームでの恵みの生活に戻ることができました。

その後、三十歳のときに牧子姉妹と不思議に結婚に導かれました。牧子の実家もクリスチャンホームでしたので、祈りの結果として与えられる導きに従って、確信をもって前進することができたことも感謝です。年の差夫婦ですので考え方の差もあり喧嘩もしますが、神様を信じて日々守られ、主樹、勇矢、愛香の三人の子どもが与えられました。この豊かな恵みが与えられていることを感謝しています。

次男勇矢は、二〇〇九年の夏に四国の海で溺れ、心肺停止になりました。私はそのとき一人で東京にいたのですが、電話がかかってきたときは、このことが主から起きているとは考えずに、牧子が不注意だったのではないかときつく非難した、と記憶しています。

状況はこうでした。勇矢が溺れていたのを主樹が見つけ、すぐ引き上げることができ、近くにいた方が直ちに蘇生措置をとってくださったおかげで息を吹き返すことができました。救急車で病院に行き、

10人の証し

Unser HERR lebt

肺に塩水が入ったことへの処置が行われましたが、大きな問題もなくすぐに元気になるという話でした。自分がいたらそうはならなかったのではないかと偉そうに思ったりしていたのですが、本当にすべてが備えられていたことに感謝しました

ただ、主の計画はそれだけでなく、勇矢が溺れたことに隠された大きな意味があったことは、そのときは分かりませんでした。勇矢の病院には最新の医療機器がそろっており、全身の状況を確認したところ、勇矢の脳に大きな問題があると主治医の先生から言われました。牧子は電話で、大変なことが起こったと一生懸命話すのですが、溺れたけれど無事だったことの方が私にはインパクトが大きく、さっぱり理解できませんでした。本当に何が問題だったのかは、その後の診察を受けるまでまったく分かりませんでした。退院して東京に戻ってきたのですが、早急に脳外科での診断を受ける必要があると言われていたので、東京女子医大で診察を受けました。「巨大クモ膜のう胞」という症状でした。

脳の中には髄液が循環しているのですが、脳みその膜の一部が影響して循環しない部分ができて水が溜まることがあるそうです。もともとそうなっている場合もあるようですが、「のう胞」に少しずつ水が溜まり、髄液が抜けずに患部が大きくなる場合もあるということでした。勇矢はそれでした。脳のおよそ四分の一に「のう胞」の空洞ができて、写真では脳が見えず、目の近くの骨も水圧で変形しているほどになっていました。先生もここまで大きいのは珍しいとおっしゃっていました。

なにもなければふつうの人は脳のＣＴ検査を受けることはないでしょうし、ましてや子どもだったら頭を強打しないかぎりＣＴ検査の必要はないと思います。この病気は、初期はなんの症状もなく、症状が出始めても、なかなか分からず、取り返しの

付かない状況になり始めてからやっと原因が分かるということも多いようです。勇矢の場合は大きくなり続けていることが明らかで、このまま放置したら近い将来、脳の発育にも影響を与える可能性があると聞かされ、この一連の不思議な出来事に恐れながらも、早期発見につながったことに本当に感謝しました。

手術についての説明がありました。頭蓋に小さな穴を開け、「のう胞」の中の汚い膜を取り除き、人口髄液を入れて、穴をチタンの板でふさいだら終わりという説明でした。「そんなに長時間の手術ではないが、髄液を人工のものに替えるので、二～三日は熱が出るかもしれない。それでも二週間もすれば退院できる」とのことでした。相原先生という方でしたが、非常に力強く自信に満ちた先生で、安心して手術を受けることになりました。

「手術は成功しました」と言われ、ひと安心をしたのですが、翌日は寝たきりで目がうつろ、起き上がると吐いてしまうので食事もとれないような状況でした。勇矢はとてつもなく楽しい子で、いつもニコニコ笑う子でしたので、その変わりぶりにショックを受けました。髄液が頭の表面に漏れてくるため、水頭症になり、二週間でとても治るとは思えませんでした。

相原先生に「どうしてこうなったのか？」と強い口調で訊きました。その時点では、このことも主から来ているということをすっかり忘れてしまい、自分なりに納得のいく答えを探さねばと自分中心に考えていました。祈ってすべてを委ねるということをしなかったからだったのかもしれません。

検査をして、圧のかかった髄液を腹腔に逃がすためのシャントバルブを着けるべきではないか、と先生から提案され、本当に悩み、祈りました。手術のミスがないように、ガイドマーカーを頭に着けて、いよ

10 人の証し

Unser HERR lebt

いよ手術というときに、「一度注射で抜いてみましょうか」という提案があり、抜いてみると、がらっと元気になりました。ほんのわずかな圧力の差で元の勇矢に戻ったのです。「これなら手術はいらないね」ということになったのですが、翌日の勇矢はまた元の目に戻っていました。

これまでは、祈れば最善・最良が用意されている、という経験をしていましたので、安心していれば良いのだと信じてはいましたが、実際のところ、その信頼は本当に軽いものでした。本当の意味で、頼ってもおらず信頼もしていない自分の本当の姿を知りました。主は、良いことを用意してくださっているけれども、自分自身が主の働きをとどめていて、良い結果にすぐに導かれることがなかったのだと気づかされました。何度もごめんなさいと謝り、祈りました。

先生から「シャントバルブをつけましょう、通常、バルブは脳のまんなかの脳幹に入れるのです」と言われました。言葉では分かりにくいのですが、「脳みその前部の前頭葉はあまり重要な部分ではないので、そこに針を刺してチューブを通しても安全なのです」とおっしゃるのです。しかし私は、「もしなにかあったらどうするのか」と反対しました。勇矢はそもそも脳が圧迫されて動いているのに、前頭葉に何かあったら大変だと、それこそ祈り頼ることなく自分の意見を通してしまいました。でも先生は、「それなら『のう胞』に入れましょう」とあっさり快諾してくださり、手術を行い成功しました。

術後すぐには元気になりませんでしたが、圧が安定して、元気になり、病院をうろうろするほどになり、やっと退院日が決まりました。本当に感謝したのですが、退院の前日、バルブの付近に熱があり、退院が延期になりました。また打ち砕かれ、夫婦ともに本当に真剣に祈りました。炎症は二週間ほどで治まりましたが、当初二週間だった入院予定が、二カ月半かかってようやく退院することができました。

溺れてから退院までが一つのご計画だったことが分かり、本当に主に感謝しました。また多くの人がお祈りしてくださり、本当に感謝しました。

ドイツのローゼ姉妹から次のみことばをいただきました。

あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。

この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。（2歴代誌　20・15、17）

このみことばのプレゼントは夫婦にとって励みとなりました。

100％信じて頼り祈らないかぎり、イエス様は良い結果を現してくださらないことを思い知らされました。その後の検診では圧迫された脳もわずかな空洞となるまでに回復し、元気で過ごしています。祈った結果が最善であった、ということは振り返れば明らかです。祈った後でないと良い結果とならないのも明らかで、すべては偶然ではなく主の恵みです。私自身は良い人間ではありません。喉元（のどもと）過ぎれば熱さ忘るる、のことばどおり、わがままな性格はまったく変わりません。ただ、そんな自分を愛して祝福してくださるイエス様を与えてくださった主なる神様に感謝しています。

私たち夫婦の指輪に刻まれたみことばで、締めくくりたいと思います。

私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨て

て、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

（ヘブル　12・1〜2）

野田浩司
一九七〇年生れ
東京電機大学電子工学部卒
携帯電話無線機器メーカー在籍
妻／牧子
長男／主樹（かずき）
次男／勇矢（ゆうや）
長女／愛香（あいか）

尽きない主のあわれみと恵み

野田　牧子



後列左が牧子さん、夫の浩司さん、前列左から勇矢さん、愛香さん、主樹さん

あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。

（詩篇　30・11）

私は一九七八年、父 野田房男、母 野田洋子の長女として生まれました。すでに主イエス様を救い主として信じていた両親のもと、なに不自由なく、のびのびと元気に成長しました。小さい頃から日曜学校へ行き、軽井沢でのバイブルキャンプなど楽しい思い出がたくさんあります。何があっても両親が信じている神様、イエス様にお祈りすれば大丈夫という確信がありました。大切なものをなくしてしまったとき、ひとりで、怖くて眠れないときなど、そのつど、お祈りしました。なんの疑いもなく、信じていました。

カナダへ家族で移住することになった十四歳のとき、英語が分からず、誰とも分かりあえない孤独だったときも、支えとなったのは祈ることでした。でも主は、いつもぎりぎりのところで、支えて、助けてくださ

いました。英語が分からず、辛く、苦しい時期でした。中学校一年生くらいの英語力しかありませんでしたので、問題を読むのに時間がかかり、本当なら授業の時間内で終わらせなくてはいけないテストも、昼食の時間も使って、辞書を片手に一人だけで答案に向かっていました。日本にいたら、こんなことにならずにすむのに、と悲しい気持ちでいっぱいでした。年度末のテストに受からなければ、その学年をやり直さなくてはならないということで、勉強ばかりの学校生活だったように思います。

そのときは分かりませんでしたが、カナダでの生活は、今思うと家族で密な時間を過ごせましたし、いろいろな経験ができたこと、学年をもう一度やり直さずにすんだことなど、すべてが主のあわれみだった、と思います。カナダには結局、大学の二年生までいることになりました。あまり先のことを考えずに気ままに、学校へ行き、アルバイトをしたりしていました。

そんなとき、母が日本の大学への編入を勧めてくれました。勧められるままに編入試験を受け、日本の大学へ行くことにしました。その頃、ベック宣教師の紹介で主人のことを聞きましたが、結婚する気はまったくありませんでした。ただ、自分が選ぶ相手はいつもうまくいかないことが多かったですし、結婚だけは主イエス様の導きによってしたいと思っていました。そのこともあってかすぐにお断りする気になれず、とりあえず会うことにしました。しかしながら、自分のタイプではなく、理想とする人ではありませんでした。けれども、人を選ぶことに自信がなかったので、祈りつつ主にお任せしました。なぜかその頃、主人は会社員であったのに、夜勤明けなどで、平日でも会える時間がたくさんありました。頼りがいがあって、一緒にいるととても安心感があったことを思い出します。そして、出会ってから一年もしない二十二歳のとき、結婚に導かれました。

結婚後しばらくして、自分は相手のことをよく知らずに結婚してしまったのではないか、と恋愛感情もともなわずに結婚してしまったことに、夢から覚めたかのように罪悪感がおそってきました。でも自分は神様とたくさんの人たちの前に誓約をしてしまったし、神様が憎むとおっしゃっている離婚は絶対にできないと思い、八方ふさがりのようになって、息苦しく、どうしたらよいのか分かりませんでした。主が備えてくださる恵みに目を向けず、感謝もできずにいました。ただ逃げ場がないこの状況に、「助けてください」と祈りにならない祈りをしていました。主人に対しても自分の思いだけをぶつけ、悲しませてしまいました。相手を思いやるどころか、自分のことだけしか考えられない者でした。それと同時に、なんの疑いもなく信じていた主イエス様に対しても裏切られたような気分になり、いつしか、わたしが信じていた神様は、自分が洗脳されていただけで、本当はいないのかもしれないと思うようになり、自分の考えの変わりように自分でも驚きました。そのように揺れ動くわたしのことを主は忍耐をもって、見守ってくださいました。私にさえついてくれば心配などしなくていい、という主イエス様の呼びかけに耳をかたむけようとしない私を、いろいろな試練を通して訓練して、ご自身をあらわしてくださいました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（1コリント　10・13）

精神的にも追い詰められ、家の外へ出るのがこわくなり、外では極度に緊張してしまうようになって

しまいました。病院へ行ったらなんらかの病名がついていただろうと思います。ただ、「イエス様を信じます。助けてください」と祈りにならない祈りをしていました。

そんな中、義理の姉が集会に誘ってくださったり、友人の妹が働いているアルバイトを紹介してくれたりして、徐々に外へ出る機会が増えていきました。

最初の子は流産してしまったのですが、その後、長男に続いて次男、長女が与えられました。主人のことも、主が与えてくださった人だったと徐々に思えるようになり、長い月日をとおして、主イエス様の導きは完全で、最善であったのだと思えるようになりました。なによりも、問題が与えられたとき、主を見上げて、二人で祈ることができるのは感謝です。

次男の勇矢（ゆうや）は四歳のとき、夏に海でおぼれて脳のCTを撮ったことから、先天性の「くも膜のう胞」という病気であることが分かりました。おぼれてしまったときもたまたま近くにいた方が心臓マッサージをしてくださり、私が人工呼吸をして一命をとりとめることができました。先天性の「のう胞」はとても大きくなっており、いつ急死してもおかしくない状態であったことを後で知らされました。そんなに大きな空洞があったにもかかわらず、なんの障害もなく過ごせていたことは主のあわれみであり、おぼれたことによって病気が見つかったこともイエス様だと思わずにはいられませんでした。

手術は比較的簡単で、二週間もすれば退院できるとの話でしたが、息子の状態は一向によくならずに、結局二ヶ月も入院することになりました。その期間、ことあるごとに忍耐と、信仰がためされ、目の前の状況に振り回されてしまうどうしようもない自分を目の当たりにしました。しかし、心の奥底はいつも平安で、夜もぐっすりと眠ることができました。たくさんのお祈りに支えられていたのだと思います。事実、

兄弟姉妹方が祈ってくださっていました。その頃みことばをいただきました。

この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。（2歴代誌　20・17）

一緒に入院していた二年生の女の子が夜、手術の後、痛いよ痛いよと泣いていました。いたたまれなくなり、ちょうどメールをしていた姉妹に、そういう子がいるからお祈りしてください、と頼みました。ほどなく、ずっと泣いていた子がなにもいわなくなりました。主が応えてくださったと思いました。ちょっとしたことですが、その折々に、主が共にいてくださることを教えてくださいました。

もう一つの試練は父のことでした。勇矢の病気が分かる少し前に、元気だった父にがんが見つかり、腎臓癌から骨への転移でステージ4と診断されました。とてもショックで夢であってほしいと思いました。そんなとき、主は私たち家族に三度にわたって同じみことばを与えてくださいました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

このみことばが与えられたのですが、主はなにを成し遂げてくださるのか、その頃はまったく予想ができませんでした。

両親のことが心配でしたので、少しの間だからと主人を説得して、両親と一緒に住むことにしました。けれども、いざ一緒に住んでみると、キッチンやトイレなどを共同で使うことになり、不満がでてきて、その度に両親を悲しませてしまいました。自分のことしか考えることのできない自己中心な者であること、

父親がそういう状況にもかかわらず思いやりや愛のない者、両親に従えない者ということを主が見せてくださいました。それにもかかわらず、素直にごめんなさいも言えないかたくなな者であることをも示されました。主は、自分では気付かない醜さを、いつも教えてくださいます。

以前ですと、このような自分を見て落ち込み、自信をなくし、生きていても意味がないのではないか、いっそのこと死んでしまいたい、と思い悩むこともありましたが、あまり落ち込まなくなったのは、そういうだめな者であるのにもかかわらず、主は見捨てずに愛し続けてくださる、と思えるように主が変えてくださったからだと思います。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

（イザヤ　43・25）

なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。

（ローマ　3・20〜22）

この方こそ、私たちの罪のための、――私たちの罪だけでなく全世界のための、――なだめの供え物なのです。

（1ヨハネ　2・2）

その後、父は治験の対象者の一人に選ばれ、新薬を投与され、癌も小さくなり、以前より元気に主に示されるまま、自分と同じ病気の方のところへ行ったりして、イエス様をお伝えする恵みに与からせていただいています

子どもたちに対しても、主から目を離すとすぐに自分の思い通りにしなくては気がすまない自分がいます。あまり心配などしない、のんきな性格と思っていたのですが、子どものことになると、イエス様のことを忘れて心配でいっぱいになっている自分がいます。

ラザロの姉妹のマリヤがイエス様に「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに」と言ったときに、「イエスは涙を流された」とあります。それはラザロの死を悲しまれたのもそうですが、彼らの信仰のなさを悲しまれたと、どなたかのメッセージでありました。まさに、最善をいつもしてくださろうという主を疑って心配している自分がいます。

なにがあろうともいつも静まって、すべての背後にある主のご支配を信じて、祈りつつ主と共に歩んでいきたいと思います。

いつまでも主に信頼せよ。ヤハ、主は、とこしえの岩だから。

（イザヤ　26・4）

ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。

（黙示録　5・12）

野田牧子
一九七八年　東京都生まれ
ウィンザーセカンダリースクール卒業
キャピラノカレッジ卒業
共立女子大学中退
夫／浩司、長男／主樹、次男／勇矢、長女／愛香

10人の証し

Unser HERR lebt

ともに主に祈る幸せ

鈴木　美麗



お兄様の勇士さん、お母様の世喜子さん、お姉様の陽子さん、美麗さん、お父様の力さん

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。

（詩篇　103・1～5）

私は、一九九五年に神奈川県相模原市で生まれました。家族はとても仲がよく、笑い声の絶えないクリスチャンホームです。姉・陽子、兄・勇士とは喧嘩をした記憶がありません。イエス様がいつもそばにいてくださるという環境に生まれ育ったので、イエス様を信じることは、わたしにとってとても自然なことでした。

二〇〇八年に盛岡の喜びの集いに行く途中、車のパンクから単独事故となってしまいました。後部座席に私たち三兄弟が座っていましたが、姉と兄は、真ん中に座っていた私を、左右から覆うようにして守ってくれました。車の窓ガラスも割れて飛び散るほど、大きな事故だったにもかかわらず、幸い、家族のだれにも怪我はなく、喜びの集いに無事に参加し、洗礼の恵みにも与かることができました。

大学の友だちや家に遊びにきた子に「美麗の家の子に生まれたかった！」と何度か言われたことがありました。また、大学の友だちから、「だれかが携帯電話で写メ（写真のメール）をくれたらボーイフレンドと一緒なんだと思うけど、美麗から写メが来ると家族でどこかに行っているのだろう、と思う・・・」と言われるほどです。私は、こんな家族をイエス様が与えてくださったことを心から感謝しています。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

（詩篇　133・1～3）

姉の陽子は主をとても恐れ、親に従う人で、イエス様から祝福をいただいています。兄と私は、姉の姿から親に従うことの大切さを学んできたように思います。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。

（エペソ　6・1）

両親は、とても子煩悩で、私たち兄弟を心から愛し、大切に育ててくれました。

私たちは、バスが一時間に一本あるか、ないかという不便なところに住んでいるため、学校に通うにも両親の車の送り迎えが必須です。幼いときから、車の中は母と私との祈りの場でした。

高校生のときは、まわりの人たちの勧めもあって、はじめのうちは弁護士を目指し、法律の勉強をしたらいいのかもしれないと漠然と思っておりました。ところが高校三年生の五月、突然、父が、「美麗には、お茶の水女子大学がぴったりだよ！」と言って薦めてくれました。父は、「美麗は音楽をやったらいいよ。音楽を通してイエス様にご奉仕できたらすばらしいよ」と話してくれたのでした。

ピアノのレッスンは何年もやっていませんでしたが、幼いころから教えてくださっていた先生が留学先のイタリアから戻ってきたことを知り、受験のために再びピアノを習うこととなりました。その先生は、声楽で受験したらどうだろうと勧めてくださり、声楽も教えていただくことになりました。大学受験の準備としては、遅いスタートだったかもしれません。

大学受験の模擬試験を受けてみると、お茶の水女子大学は全国で二番という成績だったにもかかわらず、本番のセンター試験は散々な結果でした。泣きながら不勉強だったことを悔い改めました。母は、私がこれからどのようにイエス様と向き合い、どのように生活するかをさとしてくれました。「イエス様を恐れなければならないよ」と母によく言われました。母は一緒に祈ってくれました。そして、主は語ってくださいました。

「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」

とあなたを贖う主は仰せられる。（イザヤ　54・7～8）

センター試験の結果を受けとめていたときの日曜日、吉祥寺の礼拝堂で席を探していたときです。「ここが空いているわよ」と手招きしてくださる姉妹の手が見えました。その姉妹は、礼拝後、私が高校三年生で大学受験の真っ最中だと知ると、姉妹の長女の大学受験のときのお証しをしてくださいました。

その方は、センター試験の結果が悪かったにも関わらず、それでも1ランクも、2ランクも上の希望する大学に合格させていただいて、主の御心の大学だと確信した、というお話しでした。しかもお婿さんまでその大学に備えられていたというお話もしてくださいました。姉妹は、私がそのとき、当時の長女と同じような状況にいるとは知らずに話してくださったのでした。このお交わりも主からのものと、とても感謝しました。心の中にパーっと希望の光が灯ったようでした。姉妹は別れ際に「美麗ちゃんがみこころの大学に合格するように祈っているわね」と言ってくださいました。

何よりもみこころのところに行くことが私にとって一番の願いでした。お茶の水女子大学を第一希望として、私立は法学部を何校か受験するということで、受験がスタートしました。

受験の結果、法学部はことごとく閉ざされ、「法律の道ではないこと」を主がはっきりと教えてくださいました。このことは、主から来ているという強い確信がありました。家族で祈るたびに、またあるときは、礼拝や福音集会で、イエス様は、降る雨のようにみことばをくださいました。

主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばら

しいゆずりの地だ。（詩篇　16・5〜6）

雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。（イザヤ　55・10〜11）

お茶の水女子大の前期の試験が不合格だったとき、家族でいつものように祈り会をしました。姉の陽子が聖書を開いて読んでくれたみことばは、再び、「測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。」（詩篇　16・6）でした。

倍率は後期の方が前期より高くなりましたが、私の中で「お茶の水女子大はまさに主が私に用意してくださった学校だ」という確信が不思議と強くなっていきました。イエス様をまぢかに感じました。お茶の水女子大学の後期の試験は三月十二日にありました。私たちのことを家族のように祈ってくださっている姉妹から当日、みことばが届きました。

あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。（ゼパニヤ　3・17）

これは兄の勇士の大学受験のときに与えられたみことばで、集会の日めくりカレンダーにあったみことばです。私の後期の受験日が三月の十二日だったので、偶然にも大学の受験日が兄と同じ十二日だったのです。姉妹は兄のときのことを覚えていてくださっていて、嬉しくなってこのみことばを送ってくださったのです。

母は私の後期の受験のときは、ずーっとイエス様を賛美していたそうです。「ああしてください、こうしてくださいとは、もう、祈れなかった」そうです。主のみことばを信じ、感謝と賛美だけを主にお捧げしたそうです。

合格発表の日は、私たち兄弟三人と母と円陣を作り、聖書を読み、賛美しました。いよいよ発表の時刻となったので、パソコンを開いて、インターネットで合格発表の掲示版を見たとき、そこには、私の受験番号の「7番」がありました。そのとき、窓越しに一羽の鳩のような鳥がぱたぱたと羽ばたいている姿がとても美しかったです。家族で抱き合い、すぐ、ひざまずいて、イエス様を礼拝しました。

御名の栄光を、主に帰せよ。聖なる飾り物を着けて主にひれ伏せ。（詩篇　29・2）

この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から連れ出された。主があらしを静めると、波はないだ。波がないだので彼らは喜んだ。そして主は、彼らをその望む港に導かれた。（詩篇　107・28〜30）

必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに成就する。（イザヤ　14・24）

父が朝、示された箇所がやはり、「測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。」だったそうです。このように主が与えてくださった大学だとはっきり分かる形で、主がご栄光を現してくださいましたので、本当に感謝しています。主が与えてくださった場所なので周りの方々の救いを祈っていきたいと思っています。

喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。（詩篇　100・2）

私は、主の恵みと、主の奇しいみわざをほめ歌おう。主が私たちに報いてくださったすべての事について、そのあわれみと、豊かな恵みによって報いてくださったイスラエルの家への豊かないつくしみについて。（イザヤ　63・7）

鈴木美麗（みれい）
一九九五年、神奈川県出身
東京都青梅市立成木小学校、青梅市立第七中学校、錦城高校卒業
お茶の水女子大学　文教育学部芸術表現行動学科音楽表現コース在学中
父・力（つとむ）、母・世喜子（せきこ）、姉・陽子（ようこ）、兄・勇士（ゆうし）

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15 〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33 〒389−0201

■ しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会

モーセの十戒 神の聖なる戒め



ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

すぐに起こるはずのこと−ヨハネの黙示録(第1〜4巻)



ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。

光よあれ −私たちは主のもの



証しシリーズ(第1〜9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
※主は生きておられるの最新号につきましては1部100円です。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第39号

定価100円（税込み）2016年1月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。